

ヨーロッパ国際関係の幕開け？ — 1494年のフランスのイタリア侵攻 —

山 田 慎 人

はじめに

ヨーロッパに国際関係が出現したのは、はたしていつのことであったのか。国際関係という言葉が近代的な主権国家体系と捉える限り、この問いに対する一つの有力な解答は、1648年である。1648年には、言うまでもなく、三十年戦争の和平条約であるヴェストファーレン条約が締結されたが、この条約は、良く知られているように、主権国家システムとしての国際システムが確立される過程で決定的な契機であるとみなされてきた。もっとも、ヴェストファーレン条約がヨーロッパの多くの国が参加した大戦争の和平条約であったという事実が如実に示すように、すでに1648年以前にヨーロッパ諸国の間には密接なつながりがあり、ある種の国際関係が存在したことに疑いはない。さらに、最近のヨーロッパ国際関係史研究においては、主権国家体系の確立過程における1648年の意義を相対化する見方も強まっている。このような見方をとる歴史家は、一方で、すでに16世紀には神聖ローマ帝国内の諸侯が自らの領内での宗教決定権を手にしており、1648年を待たずしてローマ教皇及び神聖ローマ皇帝のヨーロッパにおける普遍的権威は失われていたこと、他方で、ヴェストファーレン条約をもって神聖ローマ皇帝の帝国内での権威が完全に失われ、帝国が単なる主権国家の集まりになったわけではなく、帝国は集団的な主権を持つ存在として生き残ったことを指摘する¹。

さて、このような見方に立ってヨーロッパにおける国際関係の歴史をさかのぼり、1648年以前にその発展における一つの大きな区切りを探し求めるとすれ

ば、その一つの有力な候補は1494年のフランス国王シャルル8世によるイタリア半島への侵攻であろう。イタリア半島南部のナポリ王国は、13世紀半ばから15世紀前半まで、フランス王家の傍系によって支配されてきたが、1435年から1442年にかけてアラゴン家のアラゴン王及びシチリア王であるアルフォンソによる侵略を受け征服された。しかし、フランス系の最後の国王であるヴァロワ＝アンジュー家のレナート1世（アンジュー公ルネ）は、ナポリの支配を失った後もナポリの支配権を主張し続けた。ルネは1480年に死去し、後継者で甥のシャルルも翌年死去して、ヴァロワ＝アンジュー家は断絶するが、その所領を相続したフランス国王ルイ11世は、ナポリ王国の王位請求権も受け継いだ。1483年に弱冠13歳で王位についたルイ11世の子シャルル8世は、当初姉とその夫の摂政下に置かれたが、独立を得た1490年代に入るとナポリ王位の獲得を最大の目的として追求した。

シャルルの野心はイタリア諸国間あるいは諸国内の対立によっても助けられる。肝心のナポリ王国には、アラゴン家の支配を嫌うアンジュー派貴族が残っており、彼らは1485年に大規模な反乱を起こし、その後一部はフランスに亡命してシャルルにナポリ攻撃を唆した。また、ミラノ公国では、1476年にミラノ公ガレアツォ・マリア・スフォルツァが暗殺され、その子ジャン・ガレアツォが7歳でミラノ公となったが、叔父のルドヴィコが権力を篡奪し、事実上の支配者となった。しかし、1489年にジャン・ガレアツォがアラゴン家のナポリ国王の孫イザベラと結婚した後、両者はルドヴィコから実権を奪い返すために、ナポリのアラゴン家に働きかけた。これに脅威を感じたルドヴィコは、シャルル8世に対して、ナポリを攻撃するよう唆した。こうしてルドヴィコ・スフォルツァと同盟を組み、ナポリの親仏派貴族、さらには教皇庁内部の親仏派とも手を組んだシャルルは、1494年9月に大軍を率いてイタリア半島に侵入した²。

シャルルのイタリア半島侵攻が近代の始まりであるという見方は、かつてはヨーロッパ史の常識と考えられていた。1950年生まれのイギリスの歴史家フェリペ・フェルナンデス＝アルメストは、最近の著作で、次のような学生時代の思い出を記している。

「1494年、シャルル8世イタリア半島に侵入、近代の始まり」。学校での歴

史の最初の授業で先生が黒板に書いた記念すべき年を、筆者は今でも思い起こすことができる。これを近代の夜明けとする考え方の背後には、フランスの侵入まで、ルネサンスはイタリアに限定されていたとする事実がある。シャルルはこの鍵をこじ開け、イタリアの芸術と思想をアルプスを越えて北方へ持ち帰り、私たちの世界を形成したイニシアティヴがヨーロッパ中に広がることを可能にした³。

フェルナンデス＝アルメストはルネサンスという言葉を、主に思想や学問、芸術といったむしろ常識的な意味で使っている。しかし、一部の歴史家や研究者にとって、イタリア半島に生まれ1494年の事件をきっかけとしてアルプスの北に広がったとされるルネサンスは、思想や芸術の分野に限定されるものではない。つまり、古代ギリシアの都市国家間に見られたような複雑な国家間の関係が、15世紀頃のイタリア半島において、多極勢力均衡と近代的外交制度の確立によって特徴づけられる近代的な国際関係の体系として、さらに洗練された形で再生されたと考える。さらに、一部の研究者は、この国際関係の分野におけるルネサンスが、イタリア半島の枠を超えて西ヨーロッパ全域へと広まる過程で、シャルル8世のイタリア侵攻は大きな契機となったと考える⁴。

もっとも、フェルナンデス＝アルメストは、上に引用した一節に続けて、「今ではこのように考える人は一人もいない」と断じている⁵。つまり、よく知られているように、近年の中世史研究、ルネサンス研究は、個人主義と近代性によって定義される芸術と思想の刷新が14世紀のイタリアで始まり、後にイタリアの外に広がったとするブルクハルト的ルネサンス観を「神話」として否定し、ルネサンスの中世的起源や地理的な遍在性を強調する傾向が強い⁶。はたして、国際関係の分野でも、1494年が近代の始まりであるという見解は、誤っているのだろうか。本稿の目的は、ヨーロッパ国際関係史における1494年の意義を再検証するという作業を通して、近代ヨーロッパ国際関係の特質について、われわれの理解を深めることにある。

第1章 1494年の何が新しかったのか？

第1節 アクターの近代化

さて、ヨーロッパの歴史における1494年の重要性とは、一体どこにあるのか。なぜ、シャルル8世のイタリア侵攻という出来事は、われわれに、それがヨーロッパの国際関係史における新たな時代の幕開けであったかのような印象を与えるのであろうか。この一つの大きな理由は、15世紀半ば以降のフランスにおける中央集権化の進展であろう。15世紀半ば、百年戦争末期のシャルル7世による税制改革と常備軍の確立、そして、15世紀後半の人口増加とそれを超える農業生産の増大によって、15世紀末までに、フランスはヨーロッパで最大の人口、税収、軍隊を持つ最強国となった。さらに、フランスの王家であるヴァロワ家は、1461年から1483年までのシャルル7世の子ルイ11世の治世と、その後を継いだシャルル8世の時代に、家系の断絶や戦争、婚姻同盟などによって、代表的なものだけでもプロヴァンスやブルゴーニュ、ブルターニュなどに支配を広げ、領土の統合や拡大を推し進めた。さらに、当時のフランスにおいて、イングランドとの長期の戦争の経験や、北部のオック語が南部のオイル語に対して優勢になっていくという言語的統一の進展を通じて、近代的なものではないとしても、ある種の国民意識が出現してきたと指摘する声もある⁷。つまり、1494年の出来事の目新しさの一つの理由は、フランスというかなりの程度近代的なアクターの出現である。

第2節 戦争の近代化

さて、近代ヨーロッパの国際関係の歴史において、その主要なアクターである国家の近代化は、常に、それらアクターの対外的行為のうち最も重要なもの、つまり戦争における近代化につながってきた。1494年のフランスのイタリア侵攻もこの例外でないとされる。事実、それは、同時代の人々や後の歴史家によって、ヨーロッパの戦争の歴史における新たな時代の幕開けであると捉えられてきた。フランスの中央集権化の軍事的効果は、一つにはシャルルの率いた軍隊の規模に現れたが、フランス軍の迅速な勝利が同時代の人々に与えた印象はそれに限られなかった。例えば、フランチェスコ・ガイッチアルディーニや

マキアヴェッリのような同時代のイタリア人は、シャルルの軍隊の成功を、新式の国民軍によるイタリアの伝統的な傭兵システムに対する勝利とみなした⁸。

シャルルの軍隊に関してもう一つ大きな注目を集めてきたのは、言うまでもなく砲兵隊である。中国より火薬が伝わった14世紀初頭以降ヨーロッパでは戦争で火器が使用されるようになったが、さまざまな技術上の問題から初期の大砲の効果は限られており、いわゆる火薬革命がヨーロッパの国際関係に最初の大きな衝撃を与えたのが、砲兵隊がイタリア各地の要塞の攻略に大きな役割を果たしたフランスのイタリア侵攻であったとされる。フランチェスコ・グイッチアルディーニは、「フランス人によって導入された新しい戦争様式」の影響について、事件より10年少し後に以下のように書き遺している。少し長くなるが、引用しておこう。

王は数多くの重装騎兵、歩兵、砲兵を率いていたが、正確にはどのくらいの数か私には分からない。火と悪疫がイタリアに侵入してきたのである。諸国家が崩れ落ち、国家を統治する方法も変わる。戦争の技術も同じように変わる。以前は、イタリアのほとんどすべては、五国の間に分割されていた。教皇庁、ナポリ、ヴェネツィア、ミラノ、それにフィレンツェである。それぞれの国家はその領土を維持しようとしてきた。一国が他の国の領土を占領しないように、あるいは一国がその他の国が恐れるほど強大にならないように、それぞれの国が気を配っていた。これらの理由からして、どれほど些細な動きですら、あらゆる動きに対して注意が向けられていた。小さな城塞が問題になっている時でさえ、大騒ぎとなるのであった。戦争が起こっても、双方の力のバランスがよく保たれ、戦争の方法もゆったりしたもので、大砲の威力もさほど強力なものではなかったので、一つの城塞を取るのにほとんど一夏全体が費やされると言った具合であった。戦争は長期にわたり、戦闘が終わっても死者は少数であり、あるいはまったく死者の出ない時もあった。フランス人の進攻は突然の嵐のように、すべてのものをめっちゃめっちゃにひっくり返したのである。…いまや、戦争は突然にして起こり激しくなった。王国全体が、かつては一つの村を征服し占領するに要した時間もかけずに征服され、占領されたのである。包囲攻撃は数カ月もかけずに、数日間、あるいは数時間で成功する。戦闘は荒々しく

血腥いものとなった。そして最後に、諸国家が維持され、滅び、与えられるのは、昔のように作られた計画と書斎の中ではなく、戦場において武力によってなされるようになったのである⁹。

ゲイツァルディーニよりさらに10年ほど後、マキアヴェッリは1494年を境にもたらされた変化について次のように書いている。「どれほど分厚くとも、砲兵隊が2、3日のうちに破壊できない壁は存在しない」¹⁰。15世紀を通じてイタリア半島に発展してきた、微妙な多極勢力均衡のシステムを一瞬にして破壊したシャルル8世の軍隊は、当時のイタリア半島の人々に、それから約300年後にフランス革命軍とナポレオンの軍隊がヨーロッパの人々に与えたのと同じような衝撃をもたらしたのである。

このような同時代人の記述を一因として、ある現代の軍事史家が述べたように、「1494年のシャルル8世のイタリア侵攻は、古いタイプの城塞に対して使われた際の攻城砲の効果を示す、顕著な例であると通常理解されている」。まさにこの攻城砲への恐れこそが、16世紀前半における、大砲の砲撃に耐えうるような新式の要塞、いわゆる「イタリア式要塞」の出現と西ヨーロッパでの普及、さらには、堅固な要塞の出現を理由とする戦争の長期化と兵力、戦費の飛躍的な増大につながったとされる。つまり、シャルル8世のイタリア侵略は、近世のヨーロッパ国際関係を規定する最重要の要因の一つである、いわゆる「軍事革命」のプロセスにおいて、「分水嶺」であったと理解されている¹¹。

第3節 西ヨーロッパ規模の国際関係の出現

しかしながら、ヨーロッパ国際関係史における1494年のシャルル8世のイタリア侵攻の意義を考えるにあたって最も重要なのは、侵攻をめぐるヨーロッパ諸国間の外交的駆け引きである。この点で、歴史家が重視してきたのは、シャルルがイタリア半島に侵攻するに至った過程よりもむしろ、侵攻後に起こった出来事である。

1494年夏に始まるフランスのナポリ遠征は、先に述べた砲兵隊の威力もあって、短期間に大成功に終わる。1494年夏、オルレアン公ルイ率いる先遣隊が北イタリアに進軍し、これに対して、ナポリ王アルフォンソ2世の弟ターラント公フェデリコ率いるナポリ艦隊は、フランス軍の南下に備え、北部イタリアの

重要な港ジェノヴァとその艦隊を押さえるために地中海を北上し、ジェノヴァ東方に兵力を上陸させた。1494年9月初めにシャルルはアルプスを越え、北部イタリアに入ったが、それとほぼ時を同じくしてオルレアン公ルイ率いるフランスとその同盟国ミラノやジェノヴァの連合軍は、ジェノヴァ近郊でナポリとその同盟国フィレンツェの軍隊を打ち破った。フランス軍はミラノから南下してフィレンツェへと向かい、その過程でイタリア中部ロマーニャ地方のナポリ側についた町やフィレンツェ領内の要塞を攻略していき、砲兵隊の威力と抵抗した町への残虐な報復に恐れをなした中部イタリアの要塞は次々と戦わずしてフランス軍に門を開いた。ナポリと同盟関係にあったフィレンツェ共和国の実質上の支配者ピエロ・デ・メディチは、シャルルの軍隊への恐れと親仏感情の強いフィレンツェ市民からの圧力によって、ナポリとの同盟を破棄し、重要ないくつかの要塞をシャルルに引き渡した。ピエロは、11月初旬に市民の反乱によって権力の座から追われるが、11月中旬にフィレンツェに入城したシャルルは、11月末に再び南下を開始し、12月にはローマに到達した。教皇アレクサンデル6世はフランス軍の安全な通行を保証し、いくつかの重要な要塞をシャルルに引き渡した。このような状況に恐れをなしたナポリ国王アルフォンソは、国民の間で自らより人気の高かった長男フェルディナンドに王位を譲って退位するが、ナポリ側の抵抗は完全に崩壊し、新国王フェルディナンド2世はシチリア国王でもあった従弟のアラゴン国王フェルナンド2世を頼ってシチリア島に逃れた。シャルルはいかなる抵抗にも遭うことなく1495年2月末にナポリに入城した¹²。

このように、シャルルのナポリ遠征は大成功に終わったが、西ヨーロッパにおける国際関係の発展という観点から見れば、より重要な展開は、シャルルのナポリ入城後に起こった。再びグイッチアルディーニの言葉を借りよう。

ナポリに対するこの勝利に、誰もが恐怖を抱く。…このように大きな王国がフランス王自身の王国に付け加えられ、しかも勝ちを制した、装備の行き届いた軍隊が依然として思いのままに王の自由になるのであれば、イタリア全体が彼の為すがままにされてしまうと誰もが思うのである。このような事態の成り行きは、イタリア人のみを悩ませただけではない。ローマ皇帝マクシミリアーンとスペイン王フェルディナンド〔アラゴン国王

フェルナンド2世]をも同様に心配させたのである。彼らがフランスに隣接しているということ、古くからの反目、こうしたことのためにフランスが何かを獲得するとなると、やきもきするとともに、疑いのもととなるのである。共通の安全のために、教皇、皇帝、スペイン王、ヴェネツィア人、ミラノが、フランスに対して防衛同盟を結ぶ¹³。

1年後にイングランド王ヘンリー7世も加盟した1495年3月の神聖同盟は、すでにイタリア半島に存在した勢力均衡の体系が西ヨーロッパ規模にまで広まった出来事として、一部の歴史家に理解されてきた。ガレット・マッティングリーは神聖同盟について次のように書いている。

それは、事実、フランスに対するヨーロッパ規模の同盟であり、ヨーロッパの主要諸国は、初めて決定的に、単一の力の体系にまとめ上げられたのである。イタリアのパワー・ポリティクスはより広い領域へと移しかえられた¹⁴。

これに対して、M. S. アンダーソンは、神聖同盟を政治的な意味での中世の終り、近代の始まりとみなす見方は単純にすぎると考える。しかし、アンダーソンも、15世紀末にヨーロッパ規模の勢力均衡の概念が広く受け入れられつつあったことの重要な証拠として、神聖同盟を重視する¹⁵。

実際に、神聖同盟は、イタリア半島におけるフランスの優越を打ち破り、ヨーロッパの力の均衡を維持するという目的を達する。西ヨーロッパの主要な諸勢力の同盟に直面したシャルルは、1495年5月にナポリに守備隊を残して、フランスへの帰途につく。北上するシャルルの軍隊とイタリア諸国の連合軍は、7月初頭にパルマの南東フォルノヴォで衝突したが、この会戦の結果は決定的なものではなく、シャルルはそのまま北上を続け、無事フランスに帰還する。しかし、ナポリでは、15世紀末から16世紀初頭のヨーロッパで最高の軍事指揮官として名を馳せることになるゴンサロ・デ・コルドバ率いるスペイン兵が、1497年初頭までにフランス軍を完全に打ち破り、フェルディナンド2世のために王国を奪い返すことに成功した¹⁶。

第2章 1494年の再検討

第1節 アクターとしての王朝国家

さて、1494年の出来事は、実際のところ、どれほど新しかったのであろうか。それは、ヨーロッパ規模の国際関係の幕開けを告げる決定的な事件であったのか。それとも、ヨーロッパにおける国際関係の発展は、ルネサンスの概念と同様、より長期にわたり地理的にもより広い範囲にまたがる緩やかな変化であり、1494年の出来事は、このような継続的な変化の過程における、よく目立ちはするものの決定的に重要ではない一つの事件にすぎないのか。

この問題を考えるにあたって第一に考慮すべきは、学生向けの教科書として書かれた近世ヨーロッパ史に関する自らの著書を、*The European Dynastic States, 1494-1660*と名付けたりチャード・ボニーが指摘するように、フランスを含め当時のヨーロッパ諸国のほとんどが「われわれが今日その言葉を理解する意味での国民国家ではなかった」という事実であろう。実際に、当時のヨーロッパ諸国の圧倒的多数は、「父から子へ、あるいは直接の男系の子孫を残さなかった親類からの相続を通じて、あるいは、婚姻同盟を通じて、あるいは（より頻度は少なかったものの）思いがけない武運の結果として獲得された王家の領土の寄せ集め」という性格を持った。

王朝国家は、その本質において、さまざまな領土の個人による結合であった。組織の点から言えば、国家はその君主個人によってのみ統合されていた。多くの支配者は、自分の国の中に、他の君主に忠誠を誓うが、戦争の際に交渉材料として押取することができるような、飛び地を抱えていた。国家を構成するそれぞれの領土において、支配者は異なる称号を名乗った。多少なりとも分別のある君主なら、支配するそれぞれの土地の独自の習慣や制度を廃止しようと試みないよう、気を使った。要するに、「正統な」君主とは、支配するための法的な称号を保持している君主であるのみならず、さらに意味を広げて、彼が支配する異なる人々の「自由 (the liberties)」を保護する者であった。君主の側が地方の伝統的な制度を尊重するという態度をとった場合、臣民の王家への忠誠心は増大したであろう。

彼らの領土における幾人かの君主の力は、他の君主のそれと比較して、より速く発展したが、すべての君主は、この過程が、彼らの領土における、よりよい言葉が見つからないと言う理由でわれわれが「政治的階級」と呼ぶ人々に受け入れられないような速度で起こらないよう、注意せねばならなかった。このことは、当時の国家が、現代人の目から見ると、苛々するほど、そして不都合なほどゆっくりとしか発展しなかったことの一つの理由であり、理論上は「絶対的な王」が実際には絶対的な権力を備えていなかったことの一つの理由である。理論的な国王の権力は、彼の権力への実際的な制限を相殺するために、抑制を受けてはならなかったのである。このような理由から、「絶対主義」や「中央集権化」といった用語は、近世ヨーロッパ史において注意深く使用されるべきである。結局のところ、これらの言葉は、フランス革命の時期になって初めて、概念として定式化されたのである¹⁷。

1494年にイタリアに侵攻したシャルル8世が支配したフランスは、まさに君主の力が、「他の君主のそれと比較して、より速く発展した」国であった。しかしながら、近世のヨーロッパ諸国の近代性に付された上記のような留保は、当時のフランスにも見事に当てはまる。確かに、15世紀の後半から16世紀の前半にかけて、フランス国王がかつて封建諸侯に授けた封土の多くは、それを支配する家系の断絶やフランス王家との婚姻、あるいは貴族の反乱などによって廃止され、王権による支配下に置かれることになった。にもかかわらず、この時期の王権による支配地の拡大を、中央集権化や国家統合の強まりという言葉で表現することには無理がある¹⁸。

このことは、例えば、シャルル8世以降の数代のフランス王の婚姻の歴史を見ただけでも、明らかになる。シャルルは、まだ12歳であった1482年に婚約した。その相手は、ハプスブルク家のマクシミリアン（後の神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世）とブルゴーニュ女公マリーの間にできた2歳の娘マルグリットであった。ブルゴーニュは、1363年に、時のフランス国王ジャン2世が末子フィリップに封土として与えたが、1369年のフィリップとフランドル伯ルイ2世の娘マルグリットの婚姻の結果、ブルゴーニュ公の支配地はフランドルやアルトワ、現在のフランシュ＝コンテにまで広がることになった。フランドル伯

ルイ2世は、男子を遺さずに1384年に死去し、その所領は娘のマルグリットと夫のフィリップによって受け継がれたからである。歴代のブルゴーニュ公は、フィリップ3世が1420年に百年戦争においてイングランド王と同盟を組んだように、フランス王にとって強力な敵対者となったが、1461年に始まるシャルル8世の父ルイ11世の治世においても、ブルゴーニュ公国はフランス国王にとって大きな脅威となった。ところが、1477年にブルゴーニュ公シャルルが一人娘マリーを残して死去し、マリーがブルゴーニュ女公となると、ルイ11世は、フランスでは女系継承が禁止されていることを根拠にフランス王の封土であるブルゴーニュ公領への支配を確保することができた。さらに、ルイは、女系の継承を禁じたいいわゆるサリカ法の規定が当てはまらないフランドルやアルトワ、フランシュ＝コンテにも野心を示した。これに対してマリーはハプスブルク家のマクシミリアンと結婚し、フランスからの独立を維持しようと図った。両者の間で1477年から1482年まで続いた明確な決着のつかない戦争の帰結が、上に述べた1482年のシャルルとマリーの娘マルグリットの婚約である。婚約に際して、2歳のマルグリットはフランス宮廷に移動し、フランス国王はフランシュ＝コンテとアルトワを婚資として受け取った¹⁹。

しかし、シャルルとマルグリットの婚約から6年後の1488年に、フランス南東部のブルゴーニュとはちょうど地理的に正反対の北西部に位置するブルターニュ公国において、ブルターニュ公フランソワ2世が一人娘アンヌを残して死去すると、すでに1483年に国王として即位していたシャルル8世の関心はブルターニュに移る。フランスからの独立の維持を望むブルターニュ女公アンヌは、すでにブルゴーニュ女公マリーと死別していたハプスブルク家のマクシミリアンと、1490年末に代理人による結婚を執り行うが、1491年初頭、フランス軍は急遽ブルターニュに侵攻してアンヌの居城レンヌを包囲した。そして、シャルルはマルグリットとの婚約を破棄し、アンヌに自らとの結婚を強いたのである。シャルルは当初マルグリット本人の身柄及び、婚資として受け取ったフランシュ＝コンテ及びアルトワをマクシミリアン返還しなかったが、1493年になって、イタリア遠征中の中立を確保するために、同年神聖ローマ皇帝となったマクシミリアンにマルグリットと両地域を返還した²⁰。

もっとも、男系が絶えた際の女系の公位継承が認められていたブルターニュにおいて、シャルルとアンヌの結婚をもって、フランス王権による支配が確固

たるものとなったわけではない。結婚後もアンヌはブルターニュの支配者であり続け、シャルルは妻アンヌを通じてのみブルターニュを支配することができた。1498年にシャルル8世が子供を遺さず死去し、ヴァロワ家の本流が断絶すると、フランス王家とブルターニュのつながりは一度絶えることになる。シャルルの死後、ヴァロワ家傍流のヴァロワ＝オルレアン家のオルレアン公ルイが、フランス国王ルイ12世となる。ルイはすでにシャルル8世の姉ジャンヌと結婚していたが、教皇アレクサンデル6世に対してジャンヌとの結婚は妻の身体的障害を理由として成就されていないと主張し、結婚の無効を求めて認可を得、アンヌと1499年に結婚した²¹。アンヌはルイ12世との間に2女を儲けて1514年に死去し、すでに50過ぎであったルイは将来のブルターニュとフランスの結合を維持するために、長女クロードに王位継承がほぼ確実視されていた従甥のアングレーム伯フランソワと結婚させた²²。翌1515年にルイ12世は死去し、フランソワ1世が即位するが、この時点でもフランスとブルターニュはフランソワとクロードの婚姻によって結合されていたにすぎない。

ブルターニュがフランスに統合されたのは、実にシャルル8世とブルターニュ女公アンヌの結婚から40年以上後の1530年代のことであった。クロードは1524年の死の直前に作成した遺書で長男のフランソワにブルターニュ公位を遺したが、フランソワがはまだ未成年であったため、父のフランソワ1世が実際の統治を行った。フランソワ1世は、1532年に王太子フランソワが成人するにあたって、賄賂によって、フランスとの統合へのブルターニュの身分制議会の同意を取り付け、これによってフランスとブルターニュの結合は確かなものとなったのである。もっとも、この時点でも王太子フランソワがブルターニュ公の称号を名乗ることが統合の条件となっており、ブルターニュは王太子フランソワの王位継承後はフランス王によって領有されることに同意したものの、いまだフランス王国から分離した存在であることにこだわった。ブルターニュ公国が完全にフランスに統合されたのは、1536年にブルターニュ公フランソワ3世、つまり仏王太子フランソワが死去した時のことであった。これ以降公位は継承されず、ブルターニュは、フランスの一地方として統治されることになる。

ブルターニュの例は、15世紀後半に大きく進んだと言われるフランスの国家統合が、真の意味での統合あるいは中央集権化に即座にはつながらなかったことを示す良い例である。そもそも、1491年のシャルル8世とブルターニュ女公

アンヌの結婚をもって両国が統合されたという、歴史書における一般的な記述は事実に反し、3代のフランス国王は2代のブルターニュ女公との結婚という、きわめて中世的な（あるいはむしろ至極近世的な）方法によってのみ、両国の結びつきを維持することができた²³。J. R. ヘイルが述べたように、

フランス王権は、一歩前進した時、近代的な目的に向かって前進したが、中世的な手段によって、つまり、相続権あるいは封建法に訴えることによって、あるいは、援助や保護の要請に応えることによってそうした。地方や町と新たな結びつきができるたびに、それはいかなる一元的な集権化の政策からも孤立した、理論的には取り消すことが可能で、義務の相互的な実践に依拠した、封建的な契約とみなされた。将来の国民国家の機構は、未だそれを意識しない人々の間で、建設されつつあった²⁴。

このような状況では、ブルターニュとフランスの統合は、ブルターニュの支配者が外国と組んでフランスによる支配に抵抗する可能性、特にブルターニュ女公とヴァロワ家以外の王家の一員との婚姻の可能性を完全に消し去った点で、大きな意義を持ったとしても、デヴィッド・ポッターが言うように、統合後も、「実際には、公国の統治は大きく変わらなかった」のであり、この時期に王権の支配下に入った他の多くの地域と同じく、地方独自の特権や制度をある程度尊重する必要があった²⁵。R. J. クネヒトがフランソワ1世の治世に関する大著の結末で述べたように、しばしばフランス最初の絶対主義君主とみなされるフランソワの統治も、あくまでも「限られた絶対主義（Limited absolutism）」にすぎなかった。フランソワとその後継者アンリ2世の強力なリーダーシップの下でフランスの集権化はある程度進展したものの、その構造的弱さは1559年のアンリの死後未成年の王が続くと明らかになり、フランスは40年にわたる内戦の時代に突入する²⁶。1494年にイタリアに侵入したシャルル8世のフランスは、近代化と中央集権化を開始し、その一定の成果が表れつつあった点では新しかったとしても、明らかに近代的な集権国家ではなかった。アクターの近代性といった点で、1494年の出来事は特に大きな重要性を持たない。

第2節 王朝国家の外交政策

国家が同一の王家によって支配される領土の寄せ集めにすぎなかった時代には、当然のことながら、ヨーロッパ諸国の対外政策は、国家全体の利益ではなく、王家の利益を重視するものになった。このことは、当時の君主が、自らの家系に他国の継承権を請求する根拠があると考えた際に、きわめて執拗にそれを追求したことにも、よく示されている²⁷。実際のところ、前節でみた、フランス王家による領土の統合が、国家の統合を意図したものであったのかは疑わしい。例えば、先に見たように、1515年の死の前年に、男子後継者のいなかったルイ12世は、長女クロードを従甥で自らの後継者アングレーム伯フランソワと結婚させ、フランスとブルターニュの結合が次の世代においても維持されることを確かにした。しかし、ルイがこの決断を行うまでには、他の多くの可能性を模索し、その中には、フランスの領土統合にとって致命的な選択肢も含まれていたのである。

そもそも、ルイは、フランス王位に就いた後も、オルレアン公領やブロワなどヴァロワ＝オルレアン家がフランス国王の封土として領有してきた土地を家の私的財産として保持し続けた。自分に男子の後継者が生まれなかった際に、次のフランス国王の手にこれらの土地の支配が渡るのを防ぐためである。これらオルレアン家が領有した土地には、北イタリアのアスティの町も含まれ、さらに、ミラノ公国への継承権の要求も含まれていた。オルレアン家のミラノ公位への要求は、1387年のミラノ公ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティの娘ヴァレンティナとフランス王の弟オルレアン公ルイの結婚に根拠を持つ。ヴィスコンティ家の男系は1447年に絶え、ミラノ女公ビアンカ・マリア・ヴィスコンティと結婚したフランチェスコ・スフォルツァとその子孫がミラノの支配者となるが、ヴァレンティナ・ヴィスコンティの孫にあたるルイ12世は、自らが正統なミラノ公であると主張し、ミラノの支配権を追求した。

事実、シャルル8世のイタリア遠征から5年後の1499年から1500年にかけてルイ12世はミラノを攻略し、その支配を確保した。神聖ローマ皇帝マクシミリアンによるミラノ公位の授与によって自らのミラノ支配を確固たるものにすることを望んだルイは、1501年に、娘クロードと前年に生まれたばかりのマクシミリアンの孫カール（後の神聖ローマ皇帝カール5世およびスペイン王カルロス1世）の婚約契約を結んだ。その内容は、ルイに男子が生まれず死去した場

合、クロードがサリカ法の当てはまらないすべての土地を受け継ぎ、たとえルイに男子が生まれても、クロードとカールの長男はブルターニュ公の地位を継承するというものであった。その後、1504年には、ルイはマクシミリアンから念願のミラノ公位の授与を受け、その見返りとして、自らに男子が誕生したとしても、クロードとカールの2人にブルゴーニュやブルターニュ、プロワのみならずミラノやアスティ、ジェノヴァ、ナポリなどイタリア半島において自らが支配権を持つと主張した土地も与えることを約束した。確かに、いまだ幼少であったクロードとカールの結婚は早くても9年後のことであり、ルイは、この協定を選択肢の一つとして結んだに過ぎない。実際に、後にルイはこの協定を破棄することになる。しかし、ルイ12世がブルゴーニュやブルターニュへのフランス国王による支配を放棄する可能性を考慮したことは、彼がフランスの国家統合に絶対的な価値をおかなかつたことを示している²⁸。ルイ12世の優れた伝記を書いたフレデリック・ボームガートナーは以下のように述べている。

フィリップ [カールの父] との反愛国主義的な合意に関してルイを執拗に非難した、アンリ・レモンニエーのような19世紀のフランスの歴史家達は、ブルターニュをフランスに結合させたのは、彼らがそれほどまでに嘆かわしいと考えた、王朝の栄光と力を増大したいという動機であって、民族主義的熱情ではなかったことに、気づかなかつた。ルイは、ブルターニュとフランスの結合を危うくするような行動をとるにあたって、両地域の結合を維持したいと考えるときと、同じ動機で行動していたに過ぎない²⁹。

以上のことから、すでに、15世紀末から16世紀初頭のフランス国王の行動を、国益の追求といった観点から説明するのが困難であることは明らかである。彼らの最大の目的は、自らの家門の利益と名誉、栄光の増大であった。

今述べたことは、話を本題に戻して、1494年のシャルル8世のイタリア遠征について考える時、さらに明瞭になる。フランスの歴史家や伝記作家は、幼い頃から騎士道物語に魅入られたシャルルが、聖地奪回のための十字軍を自ら率いることを夢見て、ナポリ征服をそのための足がかりとみなしていたことについて、一致している³⁰。フェリペ・フェルナンデス＝アルメストの言葉を借りるなら、

歴史家はかねてより、シャルル8世は騎士道物語とそのロマンスに首ったけだったとする昔ながらの見解を捨てるのに懸命だった。しかし、彼の行動を説明するほかの説は、いずれも説明の役割を果たしていない。イタリアへ侵入して経済的にも政治的にも利益はいっさい見込めない。一方、物語に出てくる自己イメージが王の心の中で押し合いを演じていたとする説は、甚だ説得力が高い。アンジュー大公ルネの跡継ぎとして、彼は失われた大いなるロマンチックな大義を継承している。ナポリ王国とそのシチリア属領の彼方にはエルサレムの誘惑が待ち構えている。失われて久しい十字軍の王国である。エルサレム王の称号は、他の君主たちの争奪戦のあげく、今はシチリア王に属している。シャルルの各伝記が示すところでは、彼は生涯騎士道物語の本の熱心な収集家だった。彼は自らをイタリアの往時の征服者—自分の名の出所のシャルルマーニュ大帝—に擬した。騎士道物語では馴染みの大スターである。彼は自分の息子〔1492年に誕生し、1495年に死去。〕を、シャルルマーニュの将軍ロランに因んで、シャルル・オルランと名付けた。この将軍は、彼の伝説が生んだ物語では、イタリア南部の各地で恋愛沙汰と武芸の両方で勇名を馳せ、同様に神々しい物語ではイスラム教徒と戦って戦死している。シャルルマーニュは歴史を超越した存在だった。伝説は彼を十字軍の勇士とし、エルサレムへ航海した物語も加えている。ただし、これは明らかに眉つば。彼は当時の王であり、将来の王でもあった。決して死に絶えない。ただ長く眠るだけ。キリスト教圏統一の時が熟した時は再び目覚める。伝説は世界最後の皇帝の予言とまぜこぜになっている。その皇帝はエルサレムを征服し、反キリスト教徒を打ち負かし、キリスト再臨の前触れとして新しい時代を始める。イタリア人はそれぞれの思惑でシャルルの幻想を後押しした³¹。

もちろん、15世紀後半における十字軍の必要性は、単に中世的な聖地回復の夢を実現するためのものではなくなっていた。1453年のコンスタンチノープルの陥落は、すでに西ヨーロッパに大きな衝撃を与えたが、オスマン＝トルコ皇帝メフメト2世はその後海軍の強化に乗り出し、ヴェネツィアの東地中海における優位を脅かした。1463年以降の戦争でヴェネツィアがネグロポンテを失ったことは、東地中海における力のバランスが大きく変化しつつあることを象徴

する出来事であった。この戦争は1479年にトルコの勝利によって終結したが、翌年にはトルコ軍がイタリア半島南部、サレント半島の先端にあるナポリ王国の町オトラントを攻撃し、1年近くにわたって占領した³²。1481年にメフメト2世が死去すると、オトラントの町は奪い返され、オスマン帝国では、メフメトの子二人による帝位継承をめぐる内戦が勃発した。この内戦では兄のバヤズイトが勝利するが、敗れた弟のジェムはロードス島の聖ヨハネ騎士団の保護を受け、バヤズイトの賄賂を受け取った騎士団長ピエール・ドブッソンに裏切られて捕虜となり、ドブッソンのフランスの城に幽閉された。ジェムの存在が、バヤズイト2世の行動をコントロールするための有効な切り札となったこともあり、トルコの脅威は一時的に減退する³³。しかし、長い目で見れば、トルコの西方への勢力拡大は、キリスト教諸国にとって大きな脅威となっていた。

また、このトルコの勢力拡大に対して、それをキリスト教世界の共通の危険とみなし打ち倒すことを望んだシャルルの反応は、すでに当時のヨーロッパ諸国の支配者の間で一般的なものではなかった。例えば、ナポリ王フェルディナンド1世は、トルコ軍をオトラントから奪い返した翌年の1482年には、ローマ教皇との戦いにおいてトルコ騎兵を雇った。さらに、ローマ教皇ですら、必要とあらば、スルタンとの協力にはやぶさかではなかった。教皇インノケンティウス8世は、1489年にジェムの身柄を聖ヨハネ騎士団から譲り受けたが、1492年に次の教皇となったアレクサンデル6世は、シャルルのイタリア侵攻の脅威に直面して、人質ジェムを利用して、トルコ皇帝バヤズイト2世との関係改善をはかり、ナポリ国王アルフォンソとバヤズイトの対仏協力を後押しした。1494年末に、アレクサンデルがバヤズイトに送った特使が、イスタンブールからの帰路、スルタンの教皇への特使とともに、教皇庁内部の反アレクサンデル勢力によってアンコナ近郊で捕えられ、スルタンがナポリ支援の見返りにジェムの暗殺を要求していたことが明らかになったことは、キリスト教世界で大きなスキャンダルとなった³⁴。このように、オスマン帝国の西方への拡張と接触の拡大は、ヨーロッパの力のバランスにおける一つの要因としてトルコを受け入れるという態度を生むことになった。

もっとも、このような変化にもかかわらず、キリスト教世界の統一の理想とその異教徒からの防衛や聖地回復の必要性の意識が、近代初頭のヨーロッパで完全に消滅したわけではない。分かりやすい例を挙げるなら、近世のヨーロッ

パで疑いなく最も重要な役割を果たした人物の一人である神聖ローマ皇帝カール5世は、「彼の皇帝としての第一の義務は、キリスト教徒間の平和を助長し、信仰を広めることだと信じていた。後者に関する彼の概念は、中世的な十字軍の伝統に深く根ざしていた」³⁵。シャルル8世は、近代初頭には徐々に弱まりつつあったが、完全に消え去ったわけではない、中世的なキリスト教騎士の理想像を追求した。彼のような考え方は、徐々に受け入れられなくなりつつあったが、いまだ全く例外的であるというわけではなかった。当時未だに、君主が名誉ある騎士として振舞うべきと考えられたことは、15世紀末から16世紀前半にかけて、シャルル8世、ルイ12世、フランソワ1世、マクシミリアン1世、カール5世など、多くの君主が死の危険を冒してまで自ら軍隊を率いたことにも、明らかである³⁶。15世紀から16世紀のヨーロッパは、こういった意味でもなだらかな過渡期にあり、特定の事件をもって人々の意識が革命的に変化したわけではない。

シャルルは、イタリア遠征を実現するために、彼の後継者ルイ12世と同じく、より現実的なフランスの国益を犠牲にしたと非難されてきた。実際に、彼は、イタリア遠征に備えて、ブルターニュ公国の支配をめぐって1480年代末から90年代初頭にかけて争ったイングランド、アラゴン、そしてハプスブルク家のマクシミリアンの3者と和解するために、数々の譲歩を申し出た。まず1492年末に、英仏海峡に面するブローニュを包囲していたイングランドに対して、多額の金銭の支払いを約束し、平和条約を結んだ。次に、1493年初頭には、アラゴン国王フェルナンド及びカスティーリャ女王イザベルと和平条約を締結し、シャルルの父ルイ11世が1463年に併合したピレネー山脈沿いのセルダーニュ及びルシヨン地方の割譲と引き換えに、両国との同盟を結んだ。最後に、先に述べたように、シャルルは、ブルターニュ女公アンと結婚するために婚約を破棄したハプスブルク家のマクシミリアンの娘マルグリットを、婚資として受け取ったアルトワやフランシュ＝コンテとともにマクシミリアンに返還した³⁷。これらの譲歩は、シャルルの聖地奪回の夢がどれだけ大きいものであったかを、雄弁に物語っている。しかし、これらの譲歩をもって、シャルルがフランスの利益を犠牲にしたと批判することは的外れである。国王が自らの、そして王朝の栄光を追求することは、当時の基準では当たり前のことであり、十字軍を率いて聖地を回復することほど君主の栄光を高めるものはなかった。確かに、

シャルル8世は当時の基準から判断しても中世的な君主であった。しかし、彼の後継者ルイ12世の政策に見られるように、王家の利益や名誉を、国家の利益の上におくことは、王朝国家が並び立つ近代初頭のヨーロッパでは極めて自然なことであった。15世紀末の王朝国家の外交政策に近代的な合理性や国益の観念を見出すことは難しく、この点でも、1494年の出来事に新しさを見つけることは難しい。

第3節 同盟と勢力均衡

しかし、15世紀のイタリア半島の勢力均衡の体系がヨーロッパ規模に拡大した出来事として、一部の歴史家が重視してきた1495年の神聖同盟については、どのように理解したらよいのであろうか。この点でまず指摘しておくべきは、15世紀末に力を強めたフランスに対して他の西ヨーロッパ諸国が同盟を組んだのは、1495年が初めてではないということである。すでに触れたように、シャルル8世は、1488年にブルターニュ公フランソワ2世が死去した機会を捉え、1491年にブルターニュに侵攻して女公アンヌに自らとの結婚を強いることによって、フランスとブルターニュの結合を実現したが、この過程において、ブルターニュ女公アンヌ、イングランド国王ヘンリー7世、アラゴン国王フェルナンド2世、ハプスブルク家のマクシミリアンの4者の間で対仏同盟網が形成された。1489年にヘンリー7世はアンヌと、次いでフェルナンドと同盟を締結し、イングランド、アラゴン両国はブルターニュ防衛のために兵力を派遣した。さらに、1490年末には、イングランド、アラゴン両国の支持を得て、マクシミリアンはアンヌに軍事的支援を与えることを約束し、代理人による結婚を執り行ったのである³⁸。

1494年の神聖同盟を、西ヨーロッパにおける勢力均衡体系の発展の中で決定的な出来事であったと評価するガレット・マッティングリーは、ブルターニュの独立を目的とする対仏同盟網の形成に一定の意義を認めながら、それはいまだイタリア戦争に向けての「実物大のドレス・リハーサル (a full-scale dress rehearsal)」にすぎなかったと結論付ける³⁹。しかし、15世紀半ば以降フランスが力を強める中でピレネー沿いの土地を奪われたアラゴン、海峡の向こう岸にあるブルターニュがフランス国王の手中に入ることを望むはずのないイングランド、そして、すでに13世紀頃からキリスト教世界におけるそ権威へのフラン

ス国王の挑戦に直面してきた神聖ローマ皇帝の位を継ぐことが予定されていた人物が、フランスのさらなる拡大を阻止するために同盟網を形成したことは、本質的に1495年の出来事と変わらない意義を持つ。

さらに、イタリア半島をめぐる国際関係を時代を遡って注意深く観察すれば、ヴィンセント・イラルディが指摘したように、1495年の構図と似た状況は、すでにその30年以上前、シャルル8世の祖父シャルル7世の時代に出現していたことが明らかになる。フランスのイタリア半島への影響力は、ナポリ国王であったアンジュー公ルネが、1442年にアラゴン王及びシチリア王のアルフォンソによってナポリを奪われた時点で、消滅したかに思われた。しかし、この状況は、1447年にミラノ公フィリッポ・マリア・ヴィスコンティが男子を遺さずに死去し、ミラノ公位の継承をめぐるイタリア諸国間の対立が激化すると、変化する。フィリッポ・マリアの後継者として有力な候補の一人は、彼の一人娘ビアンカ・マリアの夫フランチェスコ・スフォルツァであり、実際に1450年にはスフォルツァがミラノの支配権を掌握したが、当時のイタリアで最も有能な傭兵隊長の一人であったスフォルツァの下でミラノが近隣への拡張政策を継続することを恐れたヴェネチアと、イタリア半島西岸沿いに北部にまで勢力を拡大する野心を持つナポリとシチリアの支配者アルフォンソは、これに反対した。これに対して、歴史的にミラノの脅威にさらされ、ヴェネチアと手を組んでそれに対処してきたフィレンツェの実質上の支配者コジモ・デ・メディチは、この時期、むしろ南北イタリアにおけるナポリとヴェネチアの野心への恐怖を強め、スフォルツァとの同盟関係に入った。ナポリ＝ヴェネチア同盟の脅威にさらされたスフォルツァとコジモは、ナポリを餌にシャルル7世の支援を得ようと試み、この状況はシャルルにイタリア半島への影響力を得る機会を与えた。実際に、1452年2月にフィレンツェ、ミラノ、フランスは同盟を締結し、フィレンツェとミラノは、ナポリやジェノヴァなどフランス王家あるいはその傍系が過去に支配した地域でのシャルル7世の利益を支持することを約束し、これに対してシャルルはフィレンツェとミラノをいかなる攻撃からも保護することを誓った。

もっとも、フランチェスコ・スフォルツァもコジモ・デ・メディチもフランスとの協力の危険性は十分に認識していた。シャルル7世が、ナポリだけではなく、14世紀末から15世紀初頭にかけてフランスが短期間支配したジェノヴァ

や、フランス王家の傍系ヴァロア＝オルレアン家が継承権を主張するミラノそのものにも、野心を向ける危険があったからである。彼らは、フランスの援助はあくまで最後の手段と考え、むしろフランスの軍事介入の脅しを使って、ナポリとヴェネツィアを抑制することを意図した。しかし、フランスとの同盟は、ナポリ＝ヴェネツィア同盟を抑止するどころか、フランス軍の戦争準備が整う前に勝負を挑む方が得策だと考えた両国の攻撃を招くことになる。結局、シャルル7世は、英仏百年戦争終末期のイングランドとの戦闘の再開によって、イタリアに軍事介入する余裕がなくなり、1453年のコンスタンチノーブル陥落の知らせにイタリア諸国が衝撃を受けたこともあって、戦争はフランスの本格的な介入なしに1454年のロディの和平によって終結した。1454年から翌年にかけて、五つの主要国であるミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ナポリ、教皇領を含む多くのイタリア半島の国々が参加して形成された有名なイタリア同盟の背景には、イタリア諸国によるフランスのような外部勢力へのアピールが危険であるという認識があった。つまり、イタリア同盟はイタリアの平和と現状の維持という目的を持ったが、特にフランチェスコ・スフォルツァとアルフォンソをミラノとナポリの正統な支配者と認め、暗にフランス王家及びその傍系による継承権要求を否定したのである。

しかし、現状維持を基礎とするイタリア半島の安定は、半島の主要諸国が現状の維持を望む限りにおいてのみ、維持されうるものであった。フランスの野心の対象となりうる2つの主要国の支配者のうち、スフォルツァが現状維持による平和を支えるために努力したのに対し、アルフォンソは自らの野心を実現するための攻撃的政策を継続し、教皇と対立し、ジェノヴァに海軍による攻撃を仕掛けた。教皇やジェノヴァがナポリの脅威に直面してフランスに接近することを恐れたスフォルツァは、イタリア同盟を維持してフランスの介入を阻止するために苦心した。彼は、ナポリ王家との婚姻をまとめてナポリとの関係を強化し、それによってアルフォンソの行動を抑制して、教皇やジェノヴァと和解させようと努力した。しかし、アルフォンソは攻撃的政策を改めず、1458年2月についてジェノヴァはフランス国王の保護を求め、シャルル7世の主権を承認する。いまやアルフォンソをフランスより危険だとみなすようになったヴェネツィアやコジモ・デ・メディチも、スフォルツァの警告を無視して、フランス寄りの政策をとるようになった。1458年6月にアルフォンソが死去し、

ボルジア家の教皇カリストゥス3世が非嫡出子フェルディナンドによる王位継承を承認することを拒否したことによって、スフォルツァの危機感はさらに増大した。

しかし、直後にカリストゥス3世が死去したことによって、状況は好転する。イタリア人の新教皇ピウス2世は、イタリア半島の安定を望み、10月にフェルディナンドによるナポリ王位継承を承認した。翌年には、ピウスとスフォルツァはアンジュー家からフェルディナンドを防衛するという密約を結ぶ。1459年にアンジュー家のジャンはシャルル7世の援助を受けてナポリ侵略を開始するが、ピウスとスフォルツァは、フェルディナンドに軍事支援を与え、また、アンジュー家支持に傾きつつあったコジモ・デ・メディチを親ナポリ政策に引き戻した。さらに、スフォルツァは、西ヨーロッパ規模のフランス包囲網の建設を狙い、父王シャルル7世に大きな不満を持ち、シャルルの敵ブルゴーニュ公フィリップの下に滞在していたフランス王太子ルイ（後のルイ11世）及びブルゴーニュ公と接近し、1460年10月にルイとの間で相互援助の条約を締結した。また、シャルル7世がイングランドのランカスター家と縁戚関係にあったのに対して、スフォルツァは薔薇戦争でランカスター家と争うヨーク家と接近し、フランス王太子ルイ及びブルゴーニュ公フィリップの支援のもとでイングランドによるフランス攻撃を実現しようと図った。さらに、スフォルツァは、アラゴン王フアン2世との連携を強め、実際にフアンは自らの海軍にアンジュー公の艦隊を破壊することを指示した。このようなスフォルツァの努力もあって、アンジュー公の攻撃によって1460年後半には命運がつきたと思われたフェルディナンドは1461年春には反攻に転じ、同年シャルル7世が死去してスフォルツァと良好な関係を維持したルイが王位についてこともあって、危機を脱した。ヴィンセント・イラルディが述べたように、当時のイタリア情勢は、「興隆しつつある国民的君主の間のパワーをめぐる闘争において、すでに重要な要因となっていた。それは次世紀における大規模なフランス―スペイン間のイタリア半島の支配をめぐる敵対関係を先取りするものであった」。フランチェスコ・スフォルツァが形成しようと努力した西ヨーロッパ規模のフランス包囲網は、1495年の神聖同盟のような単一の対仏同盟に結実しなかったものの、それとよく似た西ヨーロッパ諸国の勢力配置がすでに15世紀半ばには存在したことを示している⁴⁰。

たしかに、15世紀半ばのイタリア半島をめぐる西ヨーロッパの国際関係や、1480年代末から90年代初頭にかけてのブルターニュをめぐる争いは、かなりの程度、王家の利害をめぐる争いであり、近代的な国益の概念が存在しなかった時代に、勢力均衡について語ることに、どれだけ意味があるのかという疑問は、当然のことながら存在する。しかし、逆に言えば、1494年から95年にかけての出来事がこの点で特に新しいわけではない。J. R. ヘイルによれば、ハプスブルク家のカールが1516年にスペイン王位につき3年後には神聖ローマ皇帝位も得たことでいわゆるハプスブルク帝国が出現した1510年代末に至っても、ヴァロワ朝フランスとハプスブルク勢力の二極対立は、

ヨーロッパにおける後の国際関係の特徴づける勢力均衡の意識的な追及を生みださなかった。他の諸国の本当の強さについての情報はあまりにも不確かであり、出来事の手はあまりにも速かった。おそらく、何よりも、イタリア半島外の諸国の視点から見れば、半島における戦争は、征服のための戦争であって生存のための戦争ではなかったから、彼らに長期的な計画に従って行動させる、あるいは、行動の結果として生じるバランスを認識しようとさせる誘因はほとんどなかった⁴¹。

ヘイルは、15世紀後半にヨーロッパにおいてプトレマイオスの地図への関心が高まり地理学が発展したにもかかわらず、16世紀初頭に至ってもいまだ地図が普及していなかったことも、戦略的な思考と勢力均衡の概念の発展を防げたと示唆する。

彼の王国を「見る」ことができない支配者は、地図への意識の高い後の世代が戦略的な国境線の獲得に不可欠だとみなす地域を、交渉で譲り渡してしまうことによって、不安にさせられることもなかった⁴²。

近代初頭の勢力均衡概念に見られるこのような限界にもかかわらず、グイッチャルディーニが述べたように、フランスのさらなる勢力拡大に対する「恐怖」が対仏同盟の形成につながったことは明らかであり、このことは原初的な勢力均衡の体系の存在を示唆する。しかし、そのような体系はそれ以前にも多

かれ少なかれ西ヨーロッパに存在したのであり、この点でも、1495年の神聖同盟の重要性を過大視することは誤っている。

第4節 近代的外交制度の拡大

これまで見てきたように、1494年から翌年にかけての事件のアクターの近代性に限界があり、西ヨーロッパ規模の同盟関係もそれほど目新しいものでなかったとすれば、なぜシャルルのイタリア侵攻は、一部の歴史家によって重視されてきたのか。一つの大きな理由は、シャルルのイタリア侵攻に端を發し、16世紀半ばにかけてヨーロッパの国際関係を規定する大きな要因となった一連のイタリア戦争が、西ヨーロッパにおける近代的外交制度、特に常駐外交使節の制度の普及につながったことが挙げられる。

もちろん、中世においても、条約の交渉などのために、一国の君主が他国の君主に外交使節を派遣することはあった。しかし、こういった使節は一時的なものであり、条約の締結など当初の目的を達すると帰国した。これに対して、密度の濃い国家間の関係が発展しつつあった14世紀末から15世紀前半のイタリア半島では、一部の支配者が、他の国に外交使節を駐在させ長期にわたって維持する例が見られるようになった。この常駐外交使節の制度が、イタリア半島において本格的に普及するきっかけとなったのは、何といても、先に見たミラノ公位の継承問題に端を發する1452年以降のミラノ＝フィレンツェ同盟とヴェネツィア＝ナポリ同盟の戦争であった。これら4国以外にも数多くの中小諸国を巻き込み、複雑な同盟網が形成されたこの戦争では、多くの国が自らの同盟国、そして中立を保った教皇庁に外交使節を維持した。このように、常駐外交代表の制度は、同盟国間の戦争協力の必要性から普及したが、1454年に戦争が終わった後も各国は使節の交換を止めず、むしろ平時においてもお互いに外交官を交換し維持するという習慣が根付いていった。

また、イタリア諸国は、15世紀後半に、半島外の西ヨーロッパ諸国にも、外交使節を駐在させるようになる。例えば、スフォルツァ家のミラノは1463年以降、ヴェネツィアは1479年以降フランスに大使を維持し、フィレンツェも1474年以降フランス宮廷に外交使節を常駐させるようになった。しかし、これに対して、半島外の国々が、イタリア諸国に外交使節を常駐させるということは、当初起こらなかった。これは、イタリア諸国とアルプスの北の国々の規模と力

の差を考えれば、不思議なことではない。ミラノやヴェネチア、フィレンツェにとって、フランスの動向を探り良好な関係を維持する必要は、フランスがこれらの国々とそうする必要より、はるかに大きかったのである。

ただし、一部のイタリア半島外の国は、15世紀末になると、外交使節を他のイタリア半島外の国に派遣するようになる。この点で先陣を切ったのは、自らシチリア王であり、同じアラゴン家の傍系が支配するナポリ王国とも関係が深かったアラゴン王フェルナンド2世であった。フェルナンドは、1479年の即位の直後から教皇庁に常駐大使を維持したが、1488年には、ブルターニュの問題をめぐってイングランドとの関係を強化する目的で、イングランド国王に常駐外交使節を派遣した。また、彼がほぼ同時期にブルターニュに派遣した大使にも、「好きなだけ」滞在してよいという指示を与えており、事実上の常駐使節とみなしうる。さらに、ハプスブルク家のマクシミリアンに派遣した両家の婚姻関係を成立させるための特使も、結局のところ数年間にわたって滞在することとなった。フェルナンドはシャルル8世によるブルターニュ支配の阻止に失敗し、1493年にはシャルルとの和平条約を締結するが、その直後には、おそらくフランスのイタリア侵攻の準備を観察する目的で、フランス宮廷に常駐大使を派遣した。シャルルのイタリア侵攻後には、ヴェネツィアやミラノにも常駐大使を派遣し、彼の外交ネットワークは、1495年の対仏同盟の成立に大きな役割を果たした。他のイタリア半島外の君主でフェルナンドの例に倣ったのが、マクシミリアン1世である。皇帝は、1496年までに、イングランドを除くすべての神聖同盟諸国に常駐大使を送った。

また、シャルルのナポリへの野心は、すでに常駐外交使節の制度が一般化していたイタリア諸国とアルプスの北の国々との外交関係の強化にも寄与する。1490年代初頭に、ルドヴィコ・スフォルツァはシャルル8世のみならず、フェルナンド2世やヘンリー7世、マクシミリアンに常駐大使を派遣したが、同時期にスフォルツァの敵ナポリ国王もスペインやイングランド、皇帝に常駐大使を派遣した。当初はこの流れに乗らなかったヴェネツィアも、1495年の神聖同盟の締結後には、同盟諸国に常駐大使を派遣し、フィレンツェもフランスやスペインの宮廷に常に外交使節を維持することになる。

もっとも、イタリアをめぐる争いが、即座に、すべての西ヨーロッパ諸国を結ぶ外交ネットワークの成立につながったわけではない。皇帝マクシミリアン

の外交網は、派遣相手との対立や財政難から、数年で消滅した。また、イングランドが教皇庁以外の世俗の君主に最初に常駐大使を派遣するのは、16世紀初頭のことであり、西ヨーロッパ諸国に本格的な外交網を構築するのは、1520年代に入ってからのものであった。当時の最強国フランスによる常駐使節の派遣も遅れ、1515年にフランソワ1世が即位した際に、フランス国王が常駐大使を派遣していたのは、神聖ローマ皇帝の宮廷一つのみであった。もっとも、これは、フランソワが死去した1547年には10にまで増えている⁴³。

このような多少の留保をつけたうえで、また、アラゴン国王フェルナンド2世による外交使節の本格的な利用がシャルルのイタリア侵攻の準備を待たずして、すでにブルターニュをめぐる争いの時点で始まっていたことを指摘したうえで、シャルル8世のイタリア侵攻が常駐外交代表の交換に代表される近代的な外交の拡大に大きな弾みをつけたことに、疑いはないと言っていいであろう。1494年から1515年にかけての一連のイタリアをめぐる戦争についてJ. R. ヘイルが書いたように、

大規模な同盟が決して新奇なものでなかったとしても（例えば、同盟は英仏百年戦争の帰趨を決めた）、それまで同盟はこれほどまでに速く形成されたり再構築されたりしたことはなかった。これは、外交の方法の変容によって可能になった。15世紀末から、外交官を海外の任地に一度に長年にわたって維持し、国際的な合意や方向転換をもたらすための機構を恒常的に利用できるようにしておくというやり方が、イタリア（そこではこの方法は広く受け入れられていた）から残りの西ヨーロッパに広まった⁴⁴。

確かに、1494年のシャルル8世によるイタリア侵攻以降の、イタリアをめぐる国際関係の展開の速さには、目を見張るものがある。1494年から1495年にかけてのシャルル8世のナポリ侵攻は結局のところ失敗に終わるが、1498年に即位したルイ12世は、ミラノの支配を狙って、1499年にヴェネツィアと対ミラノ同盟を結んでミラノに侵攻し、ミラノ公国の大部分を手中に収めた。次いで、ルイ12世は、1500年にアラゴン国王フェルナンド2世とナポリ分割を約したグラナダ条約を締結し、実際に1501年に両者はアラゴン家の傍系が支配するナポリ王国を分割した。しかし、1502年春には両国はナポリの分割をめぐる衝突

し、1504年初頭までにゴンサロ・デ・コルドバ率いるスペイン兵がナポリ全域を占領した。このようなフランスとアラゴンのナポリをめぐる争いにもかかわらず、1508年には、ルイ12世、フェルナンド2世、マクシミリアン1世、ローマ教皇ユリウス2世は、カンブレー条約によって、ヴェネツィアの分割を約した。1509年のフランスのヴェネツィア侵攻は成功に終わり、イタリア半島本土のヴェネツィア領の大部分を占領する。しかし、フランスの大勝は、1495年のような対仏同盟の形成につながり、1511年10月、教皇、アラゴン王、ヴェネツィアは再び神聖同盟を締結し、これにはイングランド王ヘンリー8世も加盟した。同盟軍とフランス軍の間で戦いが始まり、1512年夏までにフランス軍はイタリア半島から撤退する。しかし、ルイのあとをついで1515年に国王となったフランソワ1世は、すぐさまイタリアに侵攻し、ミラノを占領して、1520年代初頭以降のさらに本格的なハプスブルク勢力とのイタリア支配をめぐる争いに道を開くのである⁴⁵。このような短期間における度重なる戦争と、めまぐるしい同盟の形成や組み換えは、それ以前の西ヨーロッパに例をみないものであり、それが、外交ネットワークの拡大によって促進されたことに疑いはない。そして、シャルルのイタリア侵攻は、その拡大の一つの大きなきっかけとなったのである。

第5節 国民軍の神話と軍事革命

最後に、フランス軍のイタリア侵攻が、戦争の近代化においても、一つの大きな区切りになったという見解を検討しておこう。先に見たように、グイッチアルディーニやマキアヴェッリのような同時代人は、フランス軍の成功を、英仏戦争末期にフランス国王シャルル7世がその基礎を築いた新式の国民軍による、イタリアの伝統的な傭兵システムに対する勝利であると考えた。しかし、このような対比には数多くの問題点がある。

この点でまず指摘されるべきは、イタリア語の *condotta* や *condottiere* を英語で *mercenaries* や *mercenary captain*、日本語で傭兵隊、傭兵隊長と翻訳するとその存在について誤解を生みやすいことであろう。確かに、14世紀頃の傭兵部隊は、その兵士の多くがイタリア半島出身ではなく、各地の都市国家の城壁外で略奪を繰り返し、金銭的利益のために雇い主をしばしば変えるなど、傭兵という名称の一般的なイメージに適うものであった。しかし、マイケル・マレット

が指摘するように、15世紀半ばには、イタリアの傭兵隊は、雇い主による隊長への封土の授与や個々の隊員へのさまざまな手当や年金の支払いなどによって、かなりの程度、特定の国の常備軍に近い性格を持つようになった。さらに、当時のミラノやヴェネツィア、教皇庁の軍隊の内部では、伝統的な傭兵契約によらず、政府によって直接雇われた職業軍人から構成される部分が増大しつつあった⁴⁶。クリストファー・アルマンズが指摘するように、このような変化の一因は、ルネサンス期のイタリア半島における古典古代、特にローマ時代の市民軍への憧れからくる、自国民からなる軍隊を作りたいという願望であった⁴⁷。

これに対して、同時期のフランス国王シャルル7世の軍制改革は、ヨーロッパで初めて常備軍の基礎を築いたと一般に信じられているが、そこで重視されたのは軍隊が常設でありその将校と兵士が国家によって直接雇われることであって、彼らの国籍は問われず、国民軍の創設を主眼としたものではなかった。さらに、フィリップ・ド・コミーヌが記したように、シャルル7世の軍制改革は、実は、当時のイタリア半島諸国の軍隊に加えられた改革を模倣したものであったようである。事実、1455年のイタリア同盟は、平時にもイタリア諸国が一定の常備兵力を維持することを義務付けたが、その総数は、当時のフランスの常備軍より大きかった⁴⁸。

さて、それでは、肝心のシャルル8世のイタリア侵攻に関して、それがフランス国民軍のイタリア傭兵部隊に対する勝利であったという見方は正しいのだろうか。まず、フランス軍の構成から見ていこう。フランスの騎兵隊は、通常、1名の重装の槍騎兵と2名の騎馬弓兵からなる3名の戦闘員に3名の近習を加えたランスと呼ばれる単位ごとに組織されたが、シャルル8世が即位した時点で、フランス国王軍は約2400ランスの騎兵隊から成っていた。これは、1480年代末から1490年代初頭のブルターニュやフランドルでの戦争中に3500まで増加したが、イタリア遠征の直前の1493年には3000弱を数えた。シャルルは、イタリア遠征にこのうち1500ランス、つまり9000人、実際の戦闘員だけなら4500人の騎兵を率いたが、後にこれにイタリアの同盟国の騎兵6000（実際の戦闘員は約半分の3000人）が加わった。このように、封建制が色濃く残るフランスでは、常備軍は主に騎士によって構成され、騎兵に関してはかなりの常備兵力が維持されたのに対して、農民を武装させることを危険視したために、十分な歩兵部隊が存在しなかった。シャルルはイングランド国王による支配が長く、地元貴

族が農民の武装を許す伝統があったガスコーニュなどから歩兵を徴募したが、その数は十分ではなく、15世紀後半から16世紀初頭の西ヨーロッパで最強の名を馳せた傭兵部隊であるスイス槍兵と契約した。スイス兵は数の上ではシャルルの率いた歩兵の約3分の1を占めたにすぎないと思われるが、戦闘力の上では主力と考えられたことに疑いはない。このように、フランス軍はすべて常備軍から構成されるのでもなく、完全な国民軍でもなかった。また、封建制が色濃く残るフランスの軍隊の構成が、明らかに貴族からなる騎兵偏重のものであったことも、マキアヴェッリの市民軍の理想からほど遠かった⁴⁹。

シャルルのイタリア侵攻が、イタリア諸国の側の、主に政治的な理由からの抵抗の意思の喪失によって、ほとんど戦闘なく成功に終わってしまったことにより、フランス軍とイタリア諸国の軍隊の実際の戦闘における力の差を知ることが難しい。しかし、先に引用したグイッチアルディーニの言葉に気分がよくあらわれているように、実際に戦闘が行われた数少ないケースにおけるフランス軍の行動は、当時のイタリア半島の人々に、全く新たな戦争文化の導入を印象付けた。攻略した城塞の守備兵を皆殺しにするといったフランス軍のやり方は、イタリアの人々に大きな衝撃を与え、ピエロ・デ・メディチの降伏に端を発するイタリア諸国の抵抗意思の喪失に大きく影響した。マイケル・マレットによれば、シャルル8世のイタリア遠征に始まる一連のイタリア戦争は、「新たな戦争の概念」の出現をもたらした。

戦場において最終的な決着をつけたいという願望、勢力均衡の維持とわずかな政治的交渉材料の獲得のために策動するよりも、むしろ征服したいという願望、このような精神でイタリア戦争は戦われることになった⁵⁰。

アントニオ・サントスオツソは、フランス軍とイタリア諸国の軍隊が唯一本格的な戦闘を交えることになった1495年7月のフォルノヴォの戦いも、このような文脈の中で理解する。対仏同盟の形成に直面したシャルル8世は、ナポリに守備隊を残し、5月20日にスイス傭兵を含むフランス軍の主力を率いてフランスへの帰路につく。シャルルの軍隊は、ヴェネツィアとミラノに雇われた傭兵部隊を主力とする同盟軍と、7月6日にパルマ近郊のフォルノヴォで会戦するが、同盟軍は明確な数的優位にもかかわらず、フランス軍を破壊してシャル

ルのフランス帰還を阻止することに失敗した。サントスオッツによれば、この失敗の原因は、まさに傭兵システムに依拠した当時のイタリア諸国の戦争の文化に帰せられる。つまり、同盟軍の主力を提供したヴェネツィアもミラノも決定的な敗北を避けることを第一に考え、また、両国間の相互不信もあって、ヴェネツィア軍の総司令官であり、同盟軍の総司令官でもあったマントヴァ侯フランチェスコ2世ゴンザガに、冒険を避けるよう指示を与えた。実際に、タロ川を渡って対岸に陣取るフランス軍への攻撃を仕掛けた同盟軍の第一波は、降雨によるタロ川の増水によって渡河が困難であったこともあり、対岸で孤立してフランス軍に撃破された。同盟軍は、十二分な兵力が第二波の攻撃を仕掛けるために控えていたが、これらの部隊は動かず、対岸における味方の敗北を傍観したのであった⁵¹。

しかし、この結果をイタリア半島の傭兵システムの敗北と説明することは、複雑な要因が絡み合った戦闘の結果を過度に単純化するものであるように思われる。事実、同盟軍司令官ゴンザガは、タロ川の対岸を進軍するフランス軍の前衛、本隊、後衛を、渡河して分断して各個攻撃し、殲滅する計画を持っていた。マイケル・マレットが指摘し、サントスオッツ自身認めるように、この計画が失敗に終わったことには、悪天候によるタロ川の急な増水、総司令官ゴンザガ自身が第一陣を率いてフランス軍の主力への攻撃に参加し、同盟軍全体の作戦行動を調整する人物がいなかったことなど、複数の要因が存在したのである⁵²。

このようにフランスのイタリア侵攻の軍事的側面に関する、グイッチアルディーニやマキアヴェッリの見方は、客観性を欠くものであった。クエンティン・スキナーが説明するように、真の市民は兵役に服すべきであるというマキアヴェッリの主張は、アリストテレスの時代にすでに存在し、15世紀前半にレオナルド・ブルーニが「民兵論」で復活させた後、何世代にもわたるフィレンツェの人文学者によって引き継がれてきた伝統の文脈の中で理解されるべきである。また、フィレンツェがシャルル8世に降伏した際にフィレンツェからの独立を宣言したピサ攻略のための一連の戦争において、傭兵隊が全く頼りにならなかった経験も、マキアヴェッリの非合理的なまでの市民軍への憧れの一因となったと思われる⁵³。マキアヴェッリは、1499年から1503年にかけてのチェーザレ・ボルジアの中部イタリアでの一連の軍事作戦の成功を、市民兵の効率性

を示す良い例と考えたが、この点でマキアヴェッリは事実を誤認していたのであって、チェーザレの軍は基本的に傭兵軍であった⁵⁴。マイケル・マレットが述べたように、「軍事力の問題に対する解答を国民軍に求めた時、マキアヴェッリは同時代の現実ではなく、究極的な真実を認識したのである」⁵⁵。

そして、この「究極的な真実」が現実のものとなるには、マキアヴェッリの時代からさらに2世紀半以上を要し、近世の西ヨーロッパ諸国では、兵士の徴募に主に次のような二つの方法がとられた。第一の方法は、中央政府が主権の及ぶ領域内の各地域で隊長に一定数の兵士を徴募するよう委任するやり方であった。この方法は、徴募する兵隊の数や期間、地域などに関して政府にかなりの自由があるという利点があり、実際に、各国政府によって好まれた。しかし、この方法には、兵隊の徴募に時間がかかること、装備等を政府が負担せねばならず、しかもその費用を前払いする必要があることなど、数多くの問題があり、集権的支配と財政力に限界があった当時の政府にとって十分なものではなかった。実際に、近世の西ヨーロッパの主要国の中で、この方法で十分な兵力を確保できたのは、人口の多い国王直轄地を数多く持つスペインのみであった。

このように、多くの政府が自前の軍隊で戦争を戦う力を持たなかった16世紀から17世紀のヨーロッパで取られたもう一つの方法が、政府が軍事請負人と契約して、金銭の支払いと引き換えに、領土外で徴募された一定数の兵士の提供を受けるやり方である。この二番目の方法は、言うまでもなく、14世紀から15世紀にかけてのイタリアの傭兵システムを基礎にしたものであった。請負人による兵隊の徴募は、契約内容によって兵士の使用条件が制約され、高額な報酬を払う必要があるといった短所があったが、自国の領土外の兵力を使用できること、そして、極めて短期で装備付きの経験豊かな兵力を確保できるという長所もあった。実際に、スペイン以外の諸国は兵力の重要な部分を請負人に依存した。これら請負人は17世紀前半に最もよく利用されたが、三十年戦争中に皇帝軍の総司令官として活躍した高名なヴァレンシュタインは、その典型であった。さらに言えば、政府の委任を受けて国内の各地で兵隊の徴募を行った隊長も、兵士への支払いの一部を自らが懐にするなどして利益を得たある種の請負人であり、二つのシステムの間には多くの共通点があった⁵⁶。つまり、近世のヨーロッパ諸国において近代的な国民軍はいまだ確立せず、シャルル8世のフ

ランス軍もそのような軍隊ではなかった。

それでは、大砲を有効に使用したシャルルのイタリア遠征が、大砲の砲撃に耐えられるような新式要塞の出現と普及、さらに、容易に決着のつかない攻城戦が増加したことによる兵力と戦費の爆発的な増大につながったという「軍事革命」の議論についてはどうだろうか。

よく知られているように、「軍事革命」の概念は、1950年代半ばにイギリスの歴史家マイケル・ロバーツが打ち出したものである。ロバーツの議論において、決定的な軍事技術上の革新とみなされているのが、16世紀末のマウリッツ・ファン・ナッサウ（オラニエ公マウリッツ）と17世紀前半のスウェーデン国王グスタフ・アドルフによる戦術上の改革である。それまでのヨーロッパでは、16世紀を通じて最強を誇ったスペインのテルシオに代表されるような、槍歩兵の密集隊形が戦場での主役であったが、マウリッツは、いまだ発射準備に時間のかかったマスケット銃を効果的に使用方法として、銃兵を数列の長い横隊に組織し、一列ごとに一斉射撃を行っては列の最後尾に戻り次の射撃に向けて準備するという方法を取り入れた。このマウリッツの新戦術は防御を目的としたものであったが、これに対してグスタフ・アドルフは、三十年戦争中に、マスケット銃兵に前進しながら一斉射撃を繰り返させることで、その攻撃的使用に成功した。さらに、このマスケット銃の一斉射撃に、野戦砲の改良によって機動力の高まった砲兵隊による砲撃、抜刀した騎兵による突撃を効果的に組み合わせ、攻撃力と機動力の高い戦術を編み出した。ロバーツによれば、これらの新戦術は訓練と規律のとれた兵士なしに実践できず、軍事教練や制服がヨーロッパ諸国の軍隊において普及するきっかけとなった。さらに、ロバーツは、機動的な戦術の登場と同時に、三十年戦争という大戦争が発生したことで、ヨーロッパ規模で戦争を戦うための大きな戦略が必要となり、それを実行に移すためにヨーロッパ諸国の軍隊の規模が飛躍的に増大することになったと主張した⁵⁷。

このように、軍事革命の概念を生み出したのは、マイケル・ロバーツであったが、現在の歴史学において軍事革命という言葉が使われる場合、それはロバーツの議論よりもむしろ、それを批判的に発展させたジェフリー・パーカーの議論を指す。ロバーツが近世のヨーロッパにおける軍隊の拡大の原因をマウリッツ・ファン・ナッサウとグスタフ・アドルフの改革に帰したのに対して、

パーカーはそれを16紀前半に大砲の砲撃に耐えられるような複数の稜堡を持つ新式要塞が出現し、それがヨーロッパ各地に普及したことに求めた。パーカーによれば、新式要塞の出現後、戦略バランスは攻撃の優位から防御の優位へと大きく傾き、野戦は無意味でむしろ稀になり、攻城戦がヨーロッパの戦争の主流を占めることになった。さらに、新式要塞が普及した後の攻城戦には長い時間と膨大な兵力を要し、このことが、近世のヨーロッパにおける、爆発的な兵力と戦費の増大につながったとパーカーは主張する。そして、パーカーによれば、この新式要塞の出現の「触媒 (catalyst)」となった事件こそが、1494年のシャルル8世のイタリア侵攻であった⁵⁸。

パーカーの議論は、軍事史家たちによって、全く無批判に受け入れられてきたわけではない。なかでも有力な批判は、新式要塞の普及と軍隊の規模の増大の間に見られる相関関係に関するものである。多くの軍事史家は、近世における軍隊の規模の飛躍的増大を、新式要塞の出現という軍事技術上の変化ではなく、各国における中央集権化の進展といった国内政治的な要因や、三十年戦争に代表されるような大規模な戦争の頻発によって兵力増大の必要性が生まれたこと、あるいは人口増加などによって説明する⁵⁹。

また、パーカー自身が認めるように、1494年のシャルルのイタリア遠征は、大砲による砲撃が戦争で大きな役割を果たした最初のケースでもなかった。すでに百年戦争末期の1440年代から50年代にかけてフランス国王がノルマンディーやアキテーヌのイングランド側が保持した町を攻略した際に、また、1482年から92年にかけてアラゴン王フェルナンド2世とカスティーリャ女王イザベル1世がグラナダを攻略した際にも、砲兵隊は大きな役割を演じたのである⁶⁰。さらに、1494年の事件と新式要塞の普及の関係についても、一方では、すでに15世紀最後の数十年間に、イタリア半島で、小規模なものであれ稜堡を備えた要塞が建設されており、他方で、16世紀半ば以降になってもブリテン島やヨーロッパ大陸東部などヨーロッパの周縁部では新式要塞の建設は進まず、その普及には地理的な限界があった⁶¹。

しかしながら、シャルル8世のイタリア侵攻が、砲兵隊の威力を知らしめる上で決定的な役割を果たし、また、要塞改良のための本格的な努力と、新式要塞のイタリア半島、フランス、ネーデルラント、スペインなど西ヨーロッパの大部分への普及につながったことに疑いはない。そして、新式要塞の普及が軍

隊の規模の増大に与えた影響はさておき、それが近世の西ヨーロッパにおける戦争を著しく時間がかかる割には効果の薄い、明確な決着のつきにくいものにしたことも明らかである。パーカーが指摘するように、三十年戦争が、新教徒側、皇帝側双方の会戦における数度の大勝にもかかわらず容易に決着がつかなかったこと、そして、18世紀初頭のスペイン継承戦争がマールバラ公ジョン・チャーチルのいくつかの会戦における華々しい勝利にもかかわらず延々と続いたことは、いずれの戦争においても、交戦者双方がいくつかの戦略的に重要な要塞を押さえており、その攻略が容易ではなかったことによって説明される⁶²。新式要塞の普及が兵力の飛躍的増大につながったというパーカーの議論を批判するジョン・A・リンも、ルイ14世の戦争に関する優れた著作において、「会戦はルイ14世が行った戦争の命運を決めなかった」こと、そして、「攻城戦がこの時期の戦闘の最も一般的な形であり、これは特に要塞が数多く存在したフランドルや北イタリアではそうであった」ことを指摘している。

スペイン継承戦争が示しているのは、攻城戦を中心に戦われた作戦においては、攻略すべき要塞がつねに一つ余分に存在するかのように思われたことである。マールバラ公によって来る年も来る年も勝ち取られた一連の成功ですら、ルイ14世によって打ち立てられた要塞の障壁を最終的に打ち破ることができなかった。近隣の要塞の存在は、会戦及び攻城戦における勝利のインパクトを弱めた。それらの要塞は、負けた軍隊に避難所と即座の援軍を供給し、勝った軍隊の前進の障害となった⁶³。

大砲の砲撃に耐えることのできる新式要塞の普及は、16～18世紀頃の西ヨーロッパにおいて、戦争による大規模な領土の征服を難しくすることによって、勢力均衡の機能を助け、一国によるヨーロッパ支配を阻止する上で、大きな役割を果たした。この状況に本格的な変化が生じたのは、革命後のフランスで、敵の要塞を包囲してなお敵国深くに侵入し、決戦型の会戦を挑むだけの大規模な兵力の動員を可能にした、国民徴兵制度が出現した後のことである⁶⁴。200年以上の期間にわたって、ヨーロッパの力の均衡の維持に貢献した軍事技術の普及の大きな契機となった点で、シャルル8世のイタリア侵攻には、一定の重要性が認められてしかるべきかもしれない。

おわりに

これまでの考察から、1494年のフランスのイタリア侵攻が西ヨーロッパにおける近代的な国際関係の誕生につながったという見方が、いささか単純にすぎることは明らかである。一方で、近代初頭の国際関係のアクターの大部分が集権的な国民国家とは程遠い王朝国家であり、その軍隊は近代的な国民軍ではなく、その对外政策は国家全体の国益ではなく王家の利益や栄光の実現を目指すものであった。他方で、西ヨーロッパにおける大規模な同盟関係や原初的な力のバランスの計算は、1495年の神聖同盟を待たずに存在した

しかしながら、近代ヨーロッパの政治史や国際関係史、軍事史に関する通史が、しばしば1494年や1500年をその出発点として選ぶことには、全く理由がないわけではない。シャルル8世のイタリア侵攻を境に、西ヨーロッパ諸国間の戦争と外交交渉、同盟の形成と組み換えは、それまでの時代とは一段と異なる頻度と速度をもって繰り広げられることになった。このような変化には、シャルルのイタリア侵攻を大きな契機として、近代的な外交制度が西ヨーロッパ諸国に広まったことも、大きな理由となった。また、1494年の出来事は、多少時間の差はあるとしても、大砲の砲撃に耐えうる新型要塞の普及につながり、これは一国によるヨーロッパ支配を難しくすること、つまり、近代ヨーロッパに独特なものとしての独立した国々からなる国際関係の維持に大きく寄与した。当時のヨーロッパの国家やその外交政策の近代性に留保を付した上で、シャルル8世のフランス侵攻にヨーロッパにおける国際関係の発展の一つの大きな区切りとしての意義を認めることは、間違っていないであろう。

このような結論は、ヨーロッパにおける国際関係の発展の過程を、きわめて長いスパンで観察し理解する必要性の認識へと、われわれを導く。事実、シャルル8世のイタリア侵攻を大きな契機として、それまでと比べて一段と密度の濃い関係へと発展した、ヨーロッパの国際関係は、その後数世紀の間に、より近代的な主権国家体系へと変化していったが、その過程は漸進的なものであり、例えば1648年といった特定の一時点をもって説明できるものではない。この過程を気長に追っていくことが、今後の課題となろう。

Notes

- 1 拙稿「ヨーロッパにおける国際関係の出現」*Mukogawa Literary Review*, No. 46 (2010), 43-55頁、43-4頁。
- 2 M. S. Anderson, *The Origins of the Modern European State System, 1494-1618* (London, Longman, 1998), pp. 73-5.
- 3 フェリペ・フェルナンデス＝アルメスト、関口篤訳「1492 コロンブス逆転の世界史」青土社、2010年、177頁。
- 4 例えば、Garrett Mattingly, *Renaissance Diplomacy* (New York, Dover Publications, 1988), p. 124; Anderson, *The Origins of the Modern European State System*, pp. 77-8.
- 5 フェルナンデス＝アルメスト、「1492」、177頁。
- 6 例えば、ピーター・パーク、亀長洋子訳「ルネサンス」岩波書店、2005年。
- 7 Anderson, *The Origins of the Modern European State System*, pp. 69-71.
- 8 Michael Mallett, *Mercenaries and Their Masters: Warfare in Renaissance Italy* (Republished with foreword by William Caferro, Barnsley, Pen & Sword Military, 2009), p. 231.
- 9 フランチェスコ・グイッチアルディーニ、末吉孝洲訳「フィレンツェ史」太陽出版、1999年、157-8頁。
- 10 Geoffrey Parker, "The Gunpowder Revolution, 1300-1500", in Parker, ed., *The Cambridge History of Warfare* (Cambridge, Cambridge University Press, 2005), pp. 101-14, p. 105.
- 11 Frank Tallett, *War and Society in Early-Modern Europe, 1495-1715* (London, Routledge, 1992), p. 34.
- 12 Ivan Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien* (Paris, Albin Michel, 1986), pp. 57-135.
- 13 グイッチアルディーニ「フィレンツェ史」187頁。
- 14 Mattingly, *Renaissance Diplomacy*, p. 124.
- 15 Anderson, *The Origins of the Modern European State System*, pp. 77-8.
- 16 *Ibid.*, pp. 78-9.

- 17 Richard Bonney, *The European Dynastic States, 1494–1660* (Oxford, Oxford University Press, 1991), pp. 524–5.
- 18 David Potter, *A History of France, 1460–1560: The Emergence of a Nation State* (London, Macmillan, 1995), pp. 110–7.
- 19 Jean Favier, *Louis XI* (Paris, Fayard, 2001), ch. 26; Jacques Heers, *Louis XI* (Paris, Perrin, 1999), pp. 75–82.
- 20 シャルル 8 世とブルターニュ女公アンヌの結婚、ブルゴーニュ女公マルグリットとの婚約破棄とフランドルへの帰還に関しては、Didier Le Fur, *Charles VIII* (Paris, Perrin, 2006), chs. 10–13.
- 21 Frederic J. Baumgartner, *Louis XII* (New York, St. Martin's Press, 1994), pp. 71–80.
- 22 R. J. Knecht, *Renaissance Warrior and Patron: The Reign of Francis I* (Cambridge, Cambridge University Press, 1994), pp. 9–18.
- 23 *Ibid.*, pp. 349–50.
- 24 J. R. Hale, *Renaissance Europe, 1480–1520* (2nd ed., Oxford, Blackwell, 2000), pp. 77–8.
- 25 Potter, *A History of France*, p. 113.
- 26 Knecht, *Renaissance Warrior and Patron*, pp. 519–40.
- 27 Tallett, *War and Society in Early–Modern Europe*, pp. 17–8.
- 28 Baumgartner, *Louis XII*, pp. 112–8, 140–5.
- 29 *Ibid.*, p. 144.
- 30 Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, especially pp. 22–3, 27–8; Le Fur, *Charles VIII*, p. 243, chs. 14–16.
- 31 フェルナンデス＝アルメスト 「1492」、171頁。
- 32 W. H. マクニール著、清水廣一郎訳 「ヴェネツィア—東西ヨーロッパのかなめ、1081–1797—」 岩波書店、2004年、106–9頁。
- 33 Le Fur, *Charles VIII*, pp. 248–9, 251–2.
- 34 Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, pp. 17, 35–7.
- 35 William Maltby, *The Reign of Charles V* (Basingstoke, Palgrave, 2002), p. 29.
- 36 J. R. Hale, *War and Society in Renaissance Europe, 1450–1620* (Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1985), p. 30.

- 37 Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, pp. 28–30.
- 38 Le Fur, *Charles VIII*, pp. 197–212.
- 39 Mattingly, *Renaissance Diplomacy*, p. 122.
- 40 Vincent Ilardi, “The Italian League, Francesco Sforza, and Charles VII (1454–1461)”, *Studies in the Renaissance*, vol. 6 (1959), pp. 129–66. Quotation in p. 165.
- 41 Hale, *Renaissance Europe*, p. 39.
- 42 Ibid., pp. 33–4.
- 43 M. S. Anderson, *The Rise of Modern Diplomacy, 1450–1919* (London, Longman, 1993), pp. 2–10; Mattingly, *Renaissance Diplomacy*, pp. 61–77, 119–26.
- 44 Hale, *Renaissance Europe*, p. 38.
- 45 Anderson, *The Origins of the Modern European State System*, pp. 79–88.
- 46 Mallett, *Mercenaries and Their Masters*, pp. 90–4, 109–14.
- 47 Christopher Allmand, “New Weapon, New Tactics”, in Parker, ed., *The Cambridge History of Warfare*, pp. 84–100, at pp. 98–9.
- 48 Mallett, *Mercenaries and Their Masters*, pp. 108–9.
- 49 Cloulas, *Charles VIII et le mirage italien*, p. 46; Le Fur, *Charles VIII*, pp. 271–2; Baumgartner, *Louis XII*, p. 42.
- 50 Mallett, *Mercenaries and Their Masters*, p. 242.
- 51 Antonio Santosuosso, “Anatomy of Defeat in Renaissance Italy: The Battle of Fornovo in 1495”, *The International History Review*, vol. 16, no. 2 (May 1994), pp. 221–50.
- 52 Mallett, *Mercenaries and Their Masters*, p. 247; Santosuosso, “Anatomy of Defeat”, pp. 248–9.
- 53 クエンティン・スキナー著、塚田富治訳「マキアヴェッリ—自由の哲学者」未来社、1991年、62–3頁。レオナルド・ブルーニの「民兵論」は、ニコロ・マキアヴェリ著、浜田幸策訳「マキアヴェリ 戦術論」原書房、2010年の313–50頁に収録されている。
- 54 Mallett, *Mercenaries and Their Masters*, pp. 249–50.
- 55 Ibid., pp. 258–9.
- 56 Tallett, *War and Society in Early–Modern Europe*, pp. 69–76.

- 57 Michael Roberts, "The Military Revolution, 1560–1660", in Clifford J. Rogers, ed., *The Military Revolution Debate: Readings on the Military Transformation of Early Modern Europe* (Boulder, Westview Press, 1995), pp. 13–35.
- 58 Geoffrey Parker, "The 'Military Revolution, 1560–1660' — A Myth?", in Rogers, ed., *The Military Revolution Debate*, pp. 37–54; idem., *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West, 1500–1800* (2nd ed., Cambridge, Cambridge University Press, 1996), pp. 6–16.
- 59 David A. Parrott, "Strategy and Tactics in the Thirty Years' War: The 'Military Revolution' ", in Rogers, ed., *The Military Revolution Debate*, pp. 227–51; John A. Lynn, "The *trace italienne* and the Growth of Armies: The French Case", in *ibid.*, pp. 169–99; Simon Adams, "Tactics or Politics?: 'The Military Revolution' and the Hapsburg Hegemony, 1525–1648", in *ibid.*, pp. 253–72.
- 60 Parker, *The Military Revolution*, p. 8.
- 61 *Ibid.*, pp. 24–39.
- 62 *Ibid.*, pp. 16, 39–44, 163–8.
- 63 John A. Lynn, *The Wars of Louis XIV, 1667–1714* (Harlow, Longman, 1999), pp. 368–70.
- 64 Parker, *The Military Revolution*, pp. 151–3.